

平成23年 5月10日現在

機関番号：23803

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20520551

研究課題名（和文）海外短期語学研修が英語力養成に及ぼす影響について
—作文力の向上と化石化現象—

研究課題名（英文）Effects of Short-term Study Abroad Programs on the Development of English Skills: Improvement of Writing Skill and Fossilization

研究代表者

吉村 紀子 (YOSHIMURA NORIKO)

静岡県立大学・国際関係学部・教授

研究者番号：90129891

研究成果の概要（和文）：日本語を母語とする英語学習者にとって、（1）プレゼンテーション学習を主体とする短期海外語学研修が英語表現力の向上に役立つかどうか、また（2）母語の影響が果たしてどの領域において化石化に繋がるか、という2点について第二言語習得研究の観点から実証的に考察した。オハイオ州立大学で実施した夏期英語研修の参加者の団体ミシガンテストのスコアと日本の大学で学部生に実施した文法性容認度テストの結果から、（1）については、「考えや意見を整理して表現する」という論理的な自己表現力の養成には非常に有益であること、そして（2）については、母語の干渉は統語においてほとんど問題はないのに対し、形態素の領域、特に屈折要素においては顕著で、例えば3人称単数の/s/や名詞複数形の/s/の習得に関して化石化する傾向にあることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：This research project investigated two questions pertinent to the acquisition of English by Japanese college students learning English as a foreign language (JEFL): (1) Whether a short-term English study abroad program can help the JEFL improve their writing ability and (2) whether first language (L1) transfer results in fossilization, and if so, in which linguistic component such fossilization is found among the JEFL. We analyzed data from the JEFL's results on three different tests—the Michigan Test of English Language Proficiency, the Institutional Test of Written English, and the grammar acceptability test. Our analyses have showed that (1) the tailor-made, presentation-centered study abroad program is indeed effective for the improvement of logical and coherent writing in English among the JEFL, and (2) L1 transfer is a serious factor in the acquisition of inflectional morphology, unlike in narrow syntax, which seemingly leads to the fossilization of 3rd person singular /s/ and noun plural /s/ among the JEFL.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：海外語学研修、化石化現象、英語表現力、第二言語習得理論、形態素習得、虚辞

1. 研究開始当初の背景

急速に加速するグローバル化により、海外において短期英語研修を実施する大学が急増してきた。しかしながら、海外研修に関する研究はそのほとんどが学習意欲、動機づけ、異文化理解に関するもので、研修が英語力の向上に実際にどのように役立つのか、またどのような効果がどのスキルにおいて期待できるのかについて調査したものは数少なかった。そこで、本研究では海外研修の第一義的な目標が参加者の英語力の向上にあることを重視し、研修結果を言語学と第二言語習得の視点から実証的に分析することとした。

2. 研究の目的

本研究では、海外短期英語研修プログラムを第二言語習得の観点から捉え直すという観点から、以下の2つの課題を調査することが目的である。

(1) 参加学生の英語習熟度と学習ニーズに配慮して企画した、プレゼンテーション学習中心の海外短期英語研修プログラムが「自己の考えや意見などを整理して論理的に書く力」(アカデミックライティングスキル)の向上に効果的であるかどうか。

(2) 日本語を母語とする学習者の英語に頻出する機能形態素(例えば、3人称単数、過去形、冠詞、名詞複数形)の誤りが学習期間やインプット量、あるいは習熟度に比例して果たして克服できるかどうか。

本研究は、2005年～2007年科学研究費補助金研究「アカデミックコミュニケーション能力の養成を目指す海外短期英語研修プログラムの構築」の継続調査で、そこで観察された上記の事項についてさらに調査を進め再検証する。特に、(1)はグローバルコミュニケーションにとって重要な英語運用力の養成に関する実践的な問題で、一方、(2)は外国語習得において未だその本質が解明されない「化石化現象」に係わる理論的な問題である。本研究の成果が期待される。

3. 研究の方法

本研究は、研究期間中、以下の3つの被験者グループから資料を得た。

(1) 被験者グループ

① 2004年から毎年8月にオハイオ州立大学(米国・オハイオ州コロンバス州)で開始している「静岡夏期英語研修プログラム」(3週間)(Shizuoka Summer English Program, SSEP)に研究期間中に参加した文系大学生(本調査の軸)(28名)

② 静岡県立大学のグローバル COE 採択により2007年から毎年6月～7月(6週間)にオハイオ州立大学で実施している「静岡健康科学

英語研修プログラム」(Shizuoka Health Sciences English Program, SHEP)に研究期間中に参加した理系大学院生(25名)

③ 静岡県立大学の文系大学生(64名)

中高校の英語教員(16名)

英語ネイティブスピーカー(20名)

次の4種類のテスト結果を分析に使用した。

(2) 資料

① 団体ミシガンテスト

• Michigan Test of English Language Proficiency (文法・語彙・読解)

• Listening Comprehension Test (リスニング)

• Institutional Test of Written English (英作文)

② 文法性容認度調査(50問)

なお、被験者グループ①と②はそれぞれの海外研修の前後に団体ミシガンテストを受け、また被験者グループ③は文法性容認度調査に参加した。

4. 研究成果

上記2種類の海外研修プログラムの参加者グループ(①+②)が受験したミシガンテストスコアと英作文を分析した結果、前述の2つの目的に関し以下の点がわかった。

(1) 英作文力

論理的な論旨の展開やまとめ方に顕著な向上が見られた。例えば、2008年の分析では、① SSEPの学部生(グループ①12名)の場合、6段階で2段階以上向上した者が全体の42%で、その中、3名が上級レベルに達した。

② SHEPの大学院生(グループ②8名)の場合、研修開始時中級レベルであった6名が研修終了時には3名が中級の上に、他の3名が上級に向上した。

(2) 形態素の習得

③ 被験者の英作文には統語上の誤りはほとんど観察されなかった。例えば、日本語の主語代名詞省略現象の影響は被験者の英作文にはほとんど見られず、必要な主語が欠落したのは639文中5文のみであった。また、被験者の英作文ではWH-移動が25文で生じていたが、WH-句が文頭に移動していなかった誤りは1文のみであった。

④ 形態素の誤りが数多く見られたが、そのほとんどが過剰付与ではなく、欠落による間違いであった。特に、動詞の過去形/ed/の欠落率が5.78%であったのに対し、3人称単数/s/の欠落率は27.3%であった。両者の差は統計的に優位であった($t(29)=3.339, p<0.002$)点は着目すべきである。

⑤ 形態素/s/は2つの機能(3人称単数・名詞複数形)を果たすが、英作文において両者間に興味深い違いが示された。つまり、習熟

度が低い参加者にとって3人称単数が名詞複数形よりむずかしいのに対し、習熟度が高まると、2種類の/s/の間には難易度の差はほとんど無くなってしまふ(表1参照)。

表1 欠落率—「3人称単数-s」対「名詞複数形-s」

グループ	3人称単数-s		複数形-s		3人称単数 対 複数形	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	t 値	p 値
L	0.42	0.45	0.2	0.14	$t(14)=2.045$	$p<0.060$
H	0.13	0.21	0.23	0.19	$t(14)=-1.559$	$p<0.141$
計	0.27	0.38	0.22	0.16	$t(29)=0.762$	$p<0.452$

⑥ 冠詞の用法については、研修によって誤りが改善されることはなく、習得が容易でないことがわかった。

次に、被験者グループ③を対象に実施した文法性容認度調査の結果では、以下のようなことが明らかになった。

⑦ 日本語が主語省略言語であるのにも関わらず、被験者はネイティブスピーカーと同様に主語のない英文を正確に除外し、虚辞詞 *there* と *it* を主語として認識・使用できた。しかしながら、動詞 *seem/appear* 対する適切な主語の選択は日本語母語話者にとって習得が困難であることがわかった。

⑧ 日本語に存在しない WH-移動について、被験者にとって短距離移動は全く問題がないのに対し、長距離移動は生成がむずかしいことが指摘された。さらに、補文の指定部に WH-句がとどまることができるかどうか主節の動詞によって決定すること、すなわち *think/say* と *ask/wonder* の区別は上級レベルの学習者にとっても困難な問題のようである。

これらの成果に基づき、本研究では以下のような結論に至った。

(3) 結論

① プレゼンテーション学習中心の海外短期英語研修が表現の構成力と展開力に役立つことが実証的に理解できた。この点について、プレゼンテーションの準備段階で学習者がおこなった文献調査、ディスカッション、意見の段階的な構築、といった一連の言語活動が有機的に表現力養成に繋がったのではないかと考える。

② 母語の転移によって化石化の傾向にあるのは統語ではなく、形態素であることが明らかになった点について、インプット-アウトプットの連動学習の重要性と明示的な指導の必要性を強調しておきたい。

③ 動詞の意味役割と密接に関連する統語構造(例えば、*seem/appear*, *think* vs. *ask*)については、明示的な指導と学習がより効果的ではないだろうか。また、冠詞の学習については、談話学習と連動して行われることが望ましいと考える。

(4) 今後の展望

以上の研究成果は『海外短期英語研修と第2言語習得』(ひつじ書房)および国内外で学術論文として発表したほか、国際学会で最新情報の発信に努めた。

本研究から得た知見を土台に、また言語学の新たな進展を背景に、外国語(特に英語と日本語)習得過程のメカニズムの本質解明に向けて、科学研究費補助金基盤研究(B)「文法モジュールとインターフェイス論に基づく外国語習得研究の新展開と学習法への示唆」を進めています。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計20件)

- ① 武田修一. 「英語冠詞の教育意味論に関する一考察」『ことばと文化』(査読無)14号, 2011年, 25-35.
- ② 近藤隆子. Argument Structure and Conflation Patterns of Unaccusative/ Unergative Verbs, 『ことばと文化』(査読無)14号, 2011年, 11-23.
- ③ Yoshimura, Noriko & Nakayama, Mineharu. Expletives in L2 English and Narrow Syntax, *Ars Linguistica*, (査読有) Vol. 17, 2010年, 161-175.
- ④ 武田修一. 「冠詞の選択と関係詞節-名詞表現の循環仮説に基づく考察-」*Ars Linguistica*, (査読有) Vol.17, 2010年, 46-59.
- ⑤ 吉村紀子・中山峰治. 「臨界期説と化石化現象—日本語母語英語学習者からの考察」『中部地区英語教育学会紀要』(査読有)39号, 2010年, 161-166.
- ⑥ Kondo, Takako. Morphosyntactic Divergence in the Crosslinguistic Realisation of the Causative/Inchoative Alternation, 『ことばと文化』(査読無)13号, 2010年, 65-74.
- ⑦ 武田修一・吉村紀子. (他4名, 1番目・6番目)「教育言語学の展開と可能性」『ことばと文化』(査読無)13号, 2010年, 1-30.
- ⑧ 武田修一. 「教育英文法と英語冠詞の誤用分析」*Ars Linguistica*, (査読有) Vol. 16, 2009年, 72-90.
- ⑨ Yoshimura, Noriko & Nakayama, Mineharu. Nominative Case Marking and Verb Inflection in L2 Grammar: Evidence from Japanese College Students' Composition. *The Proceedings of the Tenth Tokyo Conference on Psycholinguistics* (査読有) ひつじ書房. 2009年, 359-383.
- ⑩ Yoshimura, Noriko & Nakayama, Mineharu. Acquisition of Two Types of -s by

Japanese EFL Learners: The Role of L1 Transfer. In Yang, Y-S. et al. (eds.), *Current Issues in Linguistic Interfaces*, (査読有) Hankookmunhwasa (Seoul, Korea), 2009年, 253-263.

- ⑪ Takeda, Shuichi. On the Cognitive Dependence Phenomena Observed in English Expressions, Askedal et al. (eds) *Germanic Languages and Linguistic Universals*, (査読有) John Benjamins Publishing Company, 2009年, 145-161.
- ⑫ 吉村紀子・武田修一 (他5名、1番目・2番目) 「ポッドキャストイングを利用する大学英語教育—ケーススタディー」『中部地区英語教育学会紀要』(査読有) 38号, 2009年, 213-224.
- ⑬ 中山峰治・吉村紀子. 「英語力の向上に役立つ海外研修とは」『英語教育』(査読無) 57巻, 2009年, 50-53.
- ⑭ Nakayama, Mineharu & Yoshimura, Noriko. Japanese EFL Learners' Skills Improvement and the Length of Study Abroad Programs, *Ars Linguistica*, (査読有) Vol.15, 2008年, 54-64.
- ⑮ 武田修一. 「教育英文法の意義と評価に関する—考察—冠詞の教育英文法を例として」*Ars Linguistica*, (査読有) Vol.15, 2008年, 36-53.
- ⑯ Yoshimura, Noriko & Nakayama, Mineharu. Japanese Health Sciences Doctoral Students in a Study Abroad Context, 『国際関係・比較文化研究』静岡県立大学, 第6巻, 2008年, 51-61.

[学会発表] (計20件)

- ① Yoshimura, Noriko. Locality and *Zibun* in L2 Japanese, International Conference on Practical Linguistics of Japanese (ICPLJ) 7, 2011年3月6日, サンフランシスコ州立大学.
- ② Yoshimura, Noriko. Japanese EFL Learners' Knowledge of Move α : WH-movement or WH-scrambling? European Second Language Association (EUROSLA) 20, 2010年9月3日, モデナ - レッジオ エミリア大学 (イタリア)
- ③ Nakayama, Mineharu. Dissociating Overt WH-movement from LF Interpretation in L2 Acquisition, Generative Approach to Language Acquisition North America (GALANA) 4, 2010年9月2日, トロント大学.
- ④ Yoshimura, Noriko. Expletives in L2 Grammar: A Syntax-LF Interface Approach, 第11回日本言語科学会国際大会, 2010年6月27日, 電気通信大学.
- ⑤ 吉村紀子. 「WH 移動かスクランプリングか

—中間文法における Move α 」第10回日本第二言語習得学会年次大会, 2010年6月13日, 岐阜大学.

- ⑥ 吉村紀子. 「日本語母語話者にとって3人称単数-s はなぜWh-移動よりむずかしいのか?」日本英語学会第27回大会シンポジウム, 2009年11月15日, 大阪大学.
- ⑦ Nakayama, Mineharu. Acquisition of Verbal Morphemes by Japanese EFL Learners, 招待講演, 2009年9月11日, City University of Hong Kong.
- ⑧ 吉村紀子. 「臨界期と化石化現象—日本語母語話者英語学習者からの考察」第39回中部地区英語教育学会, 2009年6月28日, 常葉学園大学.
- ⑨ Yoshimura, Noriko. Acquisition of Two Types of -s by Japanese EFL Learners: The Role of L1 Transfer, Seoul International Conference on Linguistic Interfaces, 2009年6月25日, 延世大学.
- ⑩ Yoshimura, Noriko. L1 Effects in the Acquisition of Inflectional Morphology by Japanese EFL Learners, Workshop on Interfaces in L2 Acquisition, 2009年6月19日, Universidade Nova de Lisboa (ポルトガル).
- ⑪ Yoshimura, Noriko & Nakayama, Mineharu. Effects of a Short-term English Study Abroad Program for Japanese Health Sciences Graduate Students, 言語科学会第10回国際大会, 2008年7月12日, 静岡県立大学.
- ⑫ Nakayama, Mineharu & Yoshimura, Noriko. Oral Presentation Skills in Short-term English Language Study Abroad Programs, 2008 International Conference on English Instruction and Assessment, 2008年5月3日, National Chung Chen University (台湾).

[図書] (計3件)

- ① 吉村紀子・中山峰治. ひつじ書房, 『海外短期英語研修と第2言語習得』2010年, xi+138.
- ② Kondo, Takako. Argument Structure-Morphosyntactic Links in the Second Language English of Adult speakers, 英国・エセックス大学博士論文, 262.
- ③ 武田修一. 『ケンブリッジ実用コロケーション』(McCarthy, M. & F.O' Dell 著 *English Collocations in Use*のバイリンガル版), ケンブリッジ大学出版局 (シンガポール), 221.

[その他]

静岡県立大学言語コミュニケーション研究センターホームページ

<http://langcom.u-shizuoka-ken.ac.jp>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉村 紀子 (YOSHIMURA NORIKO)
静岡県立大学・国際関係学部・教授
研究者番号：90129891

(2) 研究分担者

近藤 隆子 (KONDO TAKAKO)
静岡県立大学・国際関係学部・助教
研究者番号：60448701

武田 修一 (TAKEDA SHUICHI)
静岡県立大学・国際関係学部・教授
研究者番号：80137067

【研究協力者】

中山峰治 (NAKAYAMA MINEHARU)
オハイオ州立大学・東アジア言語文学
部・教授